第4回ジャパンC観戦記

人の望みの喜びよ

◎カツラギエースに祝福あれ

山野浩一

画◉坂口日出樹

"望み"は素晴しく表現された

長く競馬ファンが待ち望んでいた時が訪れた。日本産で日本育ち、日本の騎手が乗った馬が世界の一流馬相手に国際GIレースを勝った。しかし、人々はその瞬間を大きな当惑とともに迎えていた。ゴール直前までは誰もが「シービー！」「ルドルフ！」と叫び続けたのに、ミスターシービーも、シンボリルドルフも敗けてしまった。

望み続けた英雄への拍手がわき上がったのは、カツラギエースが返し馬でスタンド前に戻ってきてからだった。そういえば勝ったのは日本の馬だ——改めてそう気づいたように拍手は一段とはげしくなった。ゴールまで忘れられていたカツラギエースと西浦騎手に申しわけないという気持とともに、新しい感激と興奮が人々の中に育っていった。人々はその興奮の中で、人の望みの苦さと喜びをかみしめていた。

何度もワシントン・D・C・国際Sに出走しては大敗し続けてきた日本馬にとって、世界の一流馬に勝つことは夢のまた夢というようなものでしかなかった。ジャパンCを創設した時、われわれはあえてその夢を望んだ。十年後でも百年後でもいい。いつかそんなことがあってほしい。それまでずっと日本馬に声援を送り続け、遠くにある可能性をみつめていたい。そんな望みがジャパンCというレースをも育てていった。もし日本馬が勝つ時があるとすれば、その時のジャパンCが世界の大レースにふさわしいものでなければならない。勝ったことが本当の栄誉となるようなレースでなければならない。

ジャパンCが始まった頃、このレースに日本馬が勝てるのは十年先だろうといわれた。人によっては永久に勝てないだろうともいった。しかし、そうした人々の声にも"望み"がこめられていた。むしろ望みであったからこそ、あえて遠い先のこととして考えようという気持がうかがえた。望みとはそういうものだと思う。さしあたり得ることはできなくても、いつか実現するかもしれない。実現する可能性を求め続け、漠然とした期待を抱くこと——それはまた、競馬そのものの面白さでもある。世界チャンピオンといわずとも、日本ダービーや一般重賞ですら、個々の馬にとって最初はそういう存在でしかない。一万頭の中の一頭として生まれたサラブレッドには日本ダービーが全く遠くにある望みでしかないものだ。そして、そうした望みを抱くことがどれだけ楽しいことか！

サラブレッドを愛し、競馬に憑かれた人々は全てそんな望みを抱くことの喜びを知ってしまったのだろう。望みは生産者にも、オーナーにも、ファンにも、調教師にも、騎手にも、厩務員にも、競馬施行者にも、ジャーナリストにも、全てに等しく存在し、共通の喜びを与えてくれる。おそらく競馬にかかわる人々の誰もが日本馬によるジャパンC優勝という望みをどこかに抱き続けてきたにちがいない。

だが、第3回ジャパンCでキョウエイプロミスが2着となり、ミスターシービー、シンボリルドルフという戦後の日本最強クラスの馬たちが出現すると、不遜にも人々は望みを"計画"に変えてしまった。さまざまにシナリオが作られ、ミスターシービー、あるいはシンボリルドルフが勝つという設定を多くの人々が当然のことのように考えた。例年なら外国馬の名も登場するパドックの垂れ幕も、今年はずらりとミスターシービー、シンボリルドルフばかりが並んだ。人々は両三冠馬の対決と呼び、どちらが強いかという関心だけをジャパンCに向けた。いつか望みは消え去り、人々の傲り高きイヴェントとしてジャパンCが行なわれることになった。これまた不遜にも、人々はミスターシービーを神と呼び、シンボリルドルフを皇帝と呼んだ。

しかし、まことの神は人々の計画やイヴェントをあっさり突き崩し、人々の望みだけを叶えた。レースが終わってカツラギエースの晴れやかな姿をみた時、誰もがもう一度人の望みの喜びを知らされることになった。

レース後、中村勝五郎さんは「一番よい形になったね」といった。ミスターシービーやシンボリルドルフの関係者には気の毒だとは思うが、私もまたそう思う。少なくとも日本の競馬に関しては、幸運な結果だっただろう。競馬にとって最も大切なものであり、ジャパンCの本当の意義でもある"望み"をこれだけ素晴しく表現したレースはない。カツラギエースに勝たれたことは、ミスターシービーやシンボリルドルフの関係者でなくても口惜しいことだろう。それがまた日本の競馬に新しい"望み"を育てていくことにもなる。

カツラギエースよ、よくやった！

'84年世界第二の国際レース

今年のジャパンCには素晴しいメンバーが集まった。出走馬のレベルでは、この年に開催された世界の国際レースでも凱旋門賞に次ぐ、世界第二の大レースといえるだろう。最強馬マジェスティーズプリンスはアーリントンやハリウッドのような小廻りコースでは凡走しているが、ベルモントの大コースでは6勝（GI3勝）、2着3回、3着3回、着外なしという素晴しい成績である。小廻りといってもアメリカの小廻りは一周千四百メートル程度のミニチュアコースで、ベルモントとなると、東京競馬場よりも大きいから、その差は著しい。力強い追い込みをみせるマジェスティーズプリンスの能力は小廻りコースでは完全に殺されるというべきで、東京競馬場でレースをする限り、過去のジャパンC招待馬中でも最強といってよいと思う。ウイン、エスプリデュノール、ベッドタイムも各国のフリーハンデで上位にランクされる馬だし、能力水準は低くてもウェルノール、バウンディングアウェイはそれぞれの国の最強馬だ。とりわけ注目されたのはオーストラレシアからの招待馬たちである。アイルランドのワクでストロベリーロードが招待されたため、初参加のオーストラリア二頭とニュージーランド一頭の計三頭が出走することになったが、エスプリデュノールの調教師と騎手もオーストラリア人なので、オーストラレシアン・コネクション馬は招待馬の半数近くなる。"ジャパンC特例法"まで成立させ、国中あげての大きな意欲をみせたオーストラリアでは、正にジャパンCこそワールドCよりも、オリンピックよりも大きな国際競技会である。カミングス調教師は一年も前からバウンティーホークをジャパンC向けに調教してきたし、キーウイはリブリッチの故障を待っていたかのように、

正式招待が届くや否や来日した。ストロベリーロードは最も熱心に招待を希望し、馬のネームバリューに不足があれば、ピゴット騎手かシューメーカー騎手を同伴するというから、全くのところバナナのたたき売りのようだ。もともとストロベリーロードをフランスから登録したのも、大御所カミングス調教師に迷惑をかけずに招待されるための深慮遠謀だったといえよう。三頭のオーストラレシア馬は、日本のミスターシービー、シンボリルドルフ、カツラギエース以上のライバル意識を示し、キーウイ陣営はストロベリーロードとバウンティーホークに先着しただけで、まるで優勝したように喜んだ。南半球の夏の国でも、日本と同じように大きな望みがふくらんでいたのである。だが、オーストラリアでジャパンCの衛星中継をみていた人々の気持はどんなものだっただろう。少なくとも日豪決戦はオーストラリアの完敗だった。エスプリデュノールまで凡走したのだから、オーストラリア人の喜べる材料は全くない。

バート・カミングス調教師は精いっぱいの笑顔をわれわれに向けて「コングラチュレイション」といった。「バウンティーホークはよく走りました。結果にはとても満足しています」というカミングス調教師。その表情には計り知れない大きな"望み"がうかがえた。カミングスさん、また来年も来て下さい——と願わずにはおれない。おそらくまことの神はオーストラリアの望みもまた、いつか実現してくれることだろう。その時にはお別れパーティで、私も大声で「ワルツィング・マティルダ」を歌いたいと思う。たとえ吉川良がなんといおうとも！

各馬は能力をだしきった

お別れパーティで大阪日刊スポーツの梶山隆平さんが、こんな話をしてくれた。西浦騎手が「外国の馬で行くのはどれですか」というので、梶山さんは私の紹介記事によって「ウインとバウンディングアウェイが先行馬らしいけれど、そんなに行かないようだ」と答えた。西浦騎手は「じゃ、行ってみようかな」とつぶやいたという。

その話にたがわず、西浦騎手のカツラギエースは行った。ゲートが開くと長手綱で馬の気持のままに走らせた。好スタートのバウンティーホークをとらえると、たちまち先頭に立ち、一気に第一コーナーを廻る。ウインが追走するかにみえたが、すぐにおさえてしまったので、カツラギエースの独走が始った。ウインはライバルのマジェスティーズプリンスを気にしたのだろう。ウインのあとにエスプリデュノール、ベッドタイム、バウンティーホーク、シンボリルドルフらが続き、マジェスティーズプリンスは中団、ミスターシービーは一頭離れて最後尾にいる。

カツラギエースは素晴しい疾走意欲を示し、ぐんぐん他馬を引き離していった。空には低い雲が切れ切れに漂っており、雲の間からもれる薄い光が枯れた芝を奇妙に明るく輝やかせている。その光の中をカツラギエースは快走した。バックストレッチでのペースはかなり速いものだったが、カツラギエースには無理のない速度で、決して疲れるものではなかっただろう。先行できなかったバウンディングアウェイは一気に先行グループに追いついたが、そこで他馬も全力疾走に移ったため再び下っていった。「先行グループまで上った時にペースが速くなって、とてもついていけなかった」というクラーク騎手の感想は正直なものと思う。第三コーナーでミスターシービーも馬群に追いつき、ベッドタイムはウインをとらえて二番手に上った。第四コーナーにかかると、カツラギエースとベッドタイムとの差が縮まった。そして直線に入って、インコースから並びかけてくる。西浦騎手はカツラギエースを押した。カツラギエースは再び伸びて、ベッドタイムを引き離した。バウンティーホークが再び進出し、シンボリルドルフとエスプリデュノールも上ってきた。しかし、マジェスティーズプリンスと、ミスターシービー

はまだ後方である。カツラギエースは直線コースの中央を走った。坂を昇り切ってもまだ先頭だった。シンボリルドルフがベッドタイムに並びかけた時、外から素晴しい勢いでマジェスティーズプリンスがやってきた。三頭は並んだが、その前でカツラギエースが楽々とゴールインしていた。日本競馬史に於ける最も輝やかしい瞬間だった。

カツラギエースは決してスローペースに落とさなかった。途中ずっと12秒そこそこで走り続け、直線では11秒台をマークしているのだから必ずしも展開にまぎれて勝ったわけではない。2分26秒3というタイムは、メアジードーツのレコードに及ばないが、少し馬場がやわらかくなっていたし、当時に較べて芝そのものも深くなっている。東京の今の馬場をこのタイムで走れる馬はまずいないはずだ。2着のベッドタイムは一度カツラギエースをとらえにかかりながら突き放されたのだから、案外というべきだろう。むろん2着にねばっており、決して弱い馬ではないが、ヨーロッパのGIで勝てるほどの馬ではないように思う。ただ、先行してがまん強いだけにアメリカの平坦小廻りコースで使われれば一流馬として大活躍の可能性もある。この馬が去勢された理由について、大川慶次郎さんが記者会見で聞いて下さったところでは、4歳時にのどの病気で去勢せざるを得なかったということだ。のどの病気とはのど鳴りのことだろうと思うが、のど鳴りがホルモンの影響を受けるのはありそうに思える。ホルモン分泌は相互にフィードバックされるので、生殖腺と甲状腺は強く結びついており、特に甲状腺から出るチロキンは運動能力に大きくかかわっている。激しい運動をするとのど鳴りが出るのは、チロキンの分泌が過剰になってアレルギー作用を引き起こすということはないだろうか？　これはあくまで素人考えではあるが、のど鳴りの馬と去勢の関係については研究されてしかるべきだと思う。

シンボリルドルフはベッドタイムに並びかけ、マジェスティーズプリンスに抜かせなかったのだから立派だった。ある意味で日本馬の水準が高くなったことを実証したのはシンボリルドルフのレース振りだったといえよう。カツラギエースは抜けたレースをしたが、シンボリルドルフは互角のレースをした。これはとても重要なことである。シンボリルドルフはどんな場で、どんな展開になっても、海外の一流馬と接戦できるように思う。四着のマジェスティーズプリンスはさすがに最強馬らしい能力を発揮した。第四コーナーで後方にいたから、直線ではすごい脚を使って坂を駈け上ってきたことになる。目標をベッドタイムに定めて追い込んだのだろうが、ベッドタイム、シンボリルドルフをとらえ切れなかったのだから、やはり仕かけ遅れといわざるを得ない。5着にねばったウインはストロベリーロードとともに苛ちだっていて、本調子には欠いていたようだ。バウンティーホークは最後にばてて下ってしまったが好レースをした。エスプリデュノールとミスターシービーの凡走はよくわからない。キーウイの六着はこの馬としては精いっぱいの好走で、ウエルノール、カイザーシュテルン、バウンディングアウェイ、ダイアナソロンは能力的にこの程度なのだろう。

人気と着順を比較すると、カツラギエースとミスターシービーが入れ換って、キーウイとエスプリデュノールが入れ換ればほぼ人気どおりの順で入線しており、大きく荒れたようで、各馬が能力を出し切ったレースでもあった。また、国際レースでの人気が日本の競馬以上に正確に能力や調子をとらえている点も驚きだった。

セリ市購買の日本の馬

カツラギエースは三石の小生産者片山専太郎氏の牧場で生まれた。シャダイ、シンボリ、メジロ、千明といったオーナー・ブリーダー全盛時代では、このような名馬が小生産者から出ることは珍しくなっており、日高農協全体にとっての快挙といってよいと思う。それ以上に日高農協が誇れることは、カツラギエースがセリで買われた馬だという点である。カツラギエースは当初、選ばれて特別市場に出たが主取りとなった。特別市場馬にこの馬を選んだことも立派である。日本中のオーナーの誰でもこの歴史的名馬を持つことができたのに、誰もがそのチャンスを逃がしたのだから野出氏の幸運をやっかむことはできないのではないだろうか？　カツラギエースは続いて定期市場に出て七一〇万円でセリ落された。買ったのは福島の名馬商佐藤伝二氏である。かねてから馬を観る眼では日本有数と信じている佐藤さんだが、この世界的名馬を選んだことでこの人の慧眼が更に証明されたといえるだろう。佐藤さんは馬商三代目で、祖父の佐藤伝作氏は福島県の軽種馬生産の育ての親として知られており、福島のセリ場には『佐藤伝作翁之碑』が残されている。クライムカイザー、ハツシバオー、アサカシルバー、ホワイトフォンテンなど、佐藤さんに見出された名馬は多いが、ジャパンCの優勝には喜びを隠し切れず、普段無表情な佐藤さんも、この日は笑顔を絶やさなかった。「しかし、こんな馬を佐藤さんが売らずに持っていたらな」と私がいうと「それだけは考えないようにしています」とまた笑った。

カツラギエースは佐藤伝二氏の牧場で育成され、土門一美厩舎に入った。オーナーの野出氏も馬主三代目で、まだ三十一歳の若さである。大阪でトラック、タクシーなどを扱う運送業を営んでおり、父の野出長一氏の引退による二三さんの代になって初めて持った馬がカツラギエースだという。土門一美調教師もまた二代目調教師で西浦騎手とは四つちがいの若さだ。長く父の土門健司調教師のもとで調教助手を務めているので経験や技術は充分だが、最初に手がけた大物がカツラギエースで、それが世界チャンピオンの一頭に列したのだから、とてつもない飛躍である。「天皇賞がベスト・コンディションだったので、それを持続させることだけを考えてました」と土門調教師はいった。若さに似つかわしくない職人気質を持った人だと思った。そして西浦騎手の名騎乗は数十年の語り草となることだろう。第四コーナーでベッドタイムに追いつかれた時はまだ楽だったという。そしてもう一度引き離した時に勝てたと思ったそうだ。気負いが全くなく、極めて冷静である。

カツラギエースのチームは若々しい活力にあふれており、それでいて全員が優れた職人気質を持つ有能な技術者である。そんな環境に初の国際GIレースの勝馬が出たのも、のちに考えるといとも納得しやすい。彼らはジャパンCの優勝を漠然とした望みとしかとらえていず、それでいてそのための精いっぱいの努力と技術を傾けてきた。彼らは全て競馬の喜びを知っている人々だと思う。

オーストラリアからの種牡馬ボイズィーボーイ

カツラギエースの父ボイズィーボーイはバリィキスティーン牧場の生産馬で、五歳時にウイリアムヒル・マイルHに勝ったのち、フランスでムーラン・ド・ロンシャン賞に出てハビタットの二着と好走している。'71年にオーストラリアへ輸出され、南オーストラリア州の大牧場ナラング・スタッドで種牡馬となった。そしてヴィクトリア・ダービーのガレナボーイ、オークレイ・プレートのハーパガス、トウーラクHのナンカロウ、南オーストラリア・オークスのエージェントワンダーなどを出して、かなりの成功を示した。オーストラリアやニュージーランドからの輸入種牡馬は数多いが、案外現地での種牡馬成績が問題にされない。ファラモンドのような大物が、日本でもカブラヤオー、ゴールデンリボーなど多くの名馬を出しながら大種牡馬として評価されることがなかったのも、ニュージーランドでの種牡馬経験があったからではないかと思う。ボイズィーボーイは父がプリンスリーギフトの代表産駒キングストループ、母がライジングフレームの全妹という日本向きの良血で、競走成績も種牡馬成績も立派なのに、日本へ輸入されてからはほとんど注目されることがなかった。ボイズィーボーイを輸入したのは、トライバルチーフ、ゲイルーザック、ターゴワイスなどを成功させている日胆渡部牧場で、最近この牧場ほど種牡馬輸入で好成績を残しているところはない。ボイズィーボーイは'78年に輸入され、わずか二

世代の産駒だけを残して死亡した。初年度産駒にはクイーンC3着のアサヒエンジェルが出た程度で、二年目の産駒でも注目できるのはカツラギエースだけだった。ボイズィーボーイはほとんどカツラギエースを出すために日本へやってきたといえるだろう。あまり評判の高くないボイズィーボーイの仔でありながら、カツラギエースがセレクト・セールに選ばれ、七一〇万円という中の上程度の値がついたのは、二歳時にかなりできのよい産駒だったことを示すものといえる。それにしてもオーストラレシアンの大きな期待を受けた三頭を敗かしたのが、オーストラリアの種牡馬ボイズィーボーイであったことも、オーストラリアの競馬人には残念だっただろう。

カツラギエースの母タニノベンチャはカントリー牧場のオーナー・ブリーディング・ホースで、タニノムーティエと同期に活躍して京都四歳特別に勝ったタニノモスボローの半妹である。その母アベイブリッジは谷水信夫氏が輸入して、カントリー牧場の基礎牝馬の一頭となったが、タニノモスボロー以後は活躍馬を出さなかった。プリティポリー系の良血牝馬でありながら、タニノベンチャがカントリー牧場から放出されたのは、この系統の全体的な成績不振のためだろう。カントリー牧場のような大オーナー・ブリーダーなら、競馬に使われて牧場へ戻ってくる牝馬の数も多く、それらの大部分は良血馬である。タニノベンチャもカントリー牧場に戻ってから、何頭かの産駒を出したが、全て不振だった。数多くの良血牝馬の中で、タニノベンチャが整理されたのは必然的な成り行きだったと思う。そして、そのことがカツラギエース誕生の契機ともなった。谷水雄三

氏にとっては無念なことかもしれないが、名馬が生まれるプロセスにはこのような皮肉なめぐりあわせが介在することが多い。タニノベンチャを入手した片山専太郎氏は幸運だったし、放出したカントリー牧場は不運だった。しかし、その全てのプロセスがあってこそ、名馬カツラギエースが生まれたのであり、カツラギエースの栄光はこの馬の母を育てたカントリー牧場も、この馬の父を育てたナラング・スタッドや日胆渡部牧場も、等しく受けるべきものであろう。

日本の競馬も"世界水準"になった

第四回ジャパンCが終わって、多くの幸運と多くの不運が残された。レースを終えた直後にはカツラギエースが意外な英雄でしかなかったが、いずれ時間が経てば、この馬の勝利も冷厳な事実として受け入れられるようになると思う。確かにこの馬の血統や育成、調教、競走といったバックボーンには地道で着実な名馬への歩みがあった。こうしたプロセスを歩めば名馬が生まれるというわけではないが、名馬が生まれるための阻害要因は全くない。このようなバックボーンを持つ馬から日本馬として最初の国際GIレースの勝馬が出たことは、多くの地道な苦労を重ねているホースメンにとって、大きなはげみとなることだろう。カツラギエース自身も素晴しい馬体にもかかわらず目立って注目されることの少ない馬だった。四歳時は大レース前の重賞ばかりに勝ってトライアル・ホースと呼ばれ、むしろ底力のない馬と思われてきた。しかし、NHK杯や京都新聞杯のレース振りから、この馬の二千メートルでの強さを見抜いた土門調教師は五歳春に中距離レースだけに出走させ、GIの宝塚記念を含む三連勝を実現した。こうした一貫した目標を与えられたことが、カツラギエースを更に強くしたようだ。気の強いカツラギエースは、常にぎりぎりいっぱいの能力を出し切って戦うので、距離が変化すると身体のメカニズムへの負担が大きなものとなる。決して二千四百のスタミナがない馬ではないが、二千メートルを超えてからの四百メートルは、この馬の気の強さに支えられて走り抜けたといえるだろう。そして、おそらくこのジャパンCの勝利が更にカツラギエースを強くしていくだろう。

カツラギエースという馬をどう思うかという私の質問に、「ブラッド・ホース」誌のための取材で来日していたフィンガーレイクス競馬場理事長のアントニー・チャンブリー氏は力強く「エキセレンス!」といった。彼らは馬の評価を決める幾つかの用語を持っており、エキセレンスは何の条件もなく優れた馬であることを表現する言葉だ。確かに地元の利もあっただろうし、西浦騎手の名騎乗と恵まれた展開もあったかもしれない。だが、それらは馬の能力そのものと比較して大きな問題ではない。少なくともカツラギエースが恵まれた条件の中では世界の一流馬相手に勝てることは実証されたと思う。カツラギエースがヨーロッパやアメリカに遠征して勝てるとは限らない。だが、それは世界のいかなる強豪に対してもいえることだ。世界のどの馬も全てのレースに絶好調で出れるわけではないし、その馬に向いた馬場や展開に恵まれるわけでもない。それでも勝つ馬は必ず優れた能力を持った馬のどれかである。カツラギエースはそんな馬の一頭となったとはいえるだろう。

レース後多くの人々が、これで日本の馬が世界水準に追いついたというわけではないといった。だが、私はそうは思わない。およそ世界水準というのはこのぐらいのことをいうものだと考えてきた。むろんアメリカの生産レベル、イギリスやフランスの調教レベルと肩を並べたというわけではない。こうした面で肩を並べることができないのは世界中どこでも同じである。アメリカには世界の有力種牡馬の大半が集まっている。イギリスやフランスには世界の優れた産駒の大半が集まる。そうしたことを日本に求めても仕方がなく、また求めるべきものでもない。日本の競馬人も世界的な超一流馬を求めるのなら、キーンランドで馬を買い、イギリスやフランスの厩舎に馬を預ければよく、いずれ日本で育った名牝もケンタッキーで大種牡馬を交配し、ケンタッキーで育て、ヨーロッパで競馬をするのがよいと思う。そして、そんな馬がジャパンCに戻ってくればよいのである。

世界水準というものは、そうした世界競馬のダイナミズムの中に日本の馬産と競馬が加われる水準のことであって、日本産の馬が日章旗をかかげて世界の強豪をなで切るようなことではない。そのようなことはまず不可能だし、都市型の競馬圏でそういうことを求めることは自然の摂理にも反するというべきだろう。

私は日本の競馬が世界水準に達するという基準をドイツ連邦の競馬に求めてきた。バーデン大賞やオイロパ賞はイギリスやフランスからトップクラスの馬が必ず何頭か参加しており、それでいて三年に一度ぐらいの割でドイツの馬が勝っている。むろんドイツは日本の十分の一の生産頭数だから、全体的な水準ではまだドイツの方が十倍上といわねばならないかもしれない。だが、少なくとも日本の上級馬たちは、ドイツの馬と同じように三年に一度ぐらいはジャパンCに勝てるのではないかと思う。もし、そうした実績が生まれていけば、ドイツの種牡馬や繁殖牝馬が世界のあちこちから求められるように、日本のサラブレッドもその成績に応じた評価を世界から与えられるだろう。ノーザンテーストやパーソロンは日本人だけが独善的に認める大種牡馬ではなく、世界の血統の中で確かな位置を占めることだろう。シンボリルドルフやミスターシービーは世界の優駿の中の一頭となることだろう。そうなればもう日本の馬の水準ということもさほど問題ではなく、それぞれの国情の相異でしかなくなってしまう。そのような水準にあれば、時には日本産馬が本当の世界チャンピオンとなることもあるだろうし、三回や四回続けてジャパンCで敗け続けても、すぐにまた勝てるという期待も抱き続けることができるだろう。

私はもう日本の競馬水準をどうこうという必要はなくなったと思うし、これからは日本の馬が世界をめざして戦うべきだと思う。そして、カツラギエース、シンボリルドルフ、ミスターシービー級の馬なら、凱旋門賞やブリーダーズCを勝てることもありそうだと思う。まだまだ一度だけの実績でしかないが、日本の競馬には今よりもよくなれる要素がいっぱいあり、それを着実に実行していくことで現在よりも向上こそすれ、低下することはないはずだ。それもまたカツラギエースの快挙によって、より加速されて進行していくことになる。カツラギエースの経歴にみられるような地道な努力と技術向上を積み重ねていけばよいのである。

私はカツラギエースの勝利を率直に喜びたい。これこそ長い間望み続けてきたものであり、競馬の望みの喜びであるのだから——。